

第九章 光る源氏の物語 紫の上と秋好中宮、源氏の四十賀を祝う

[第一段 紫の上、薬師仏供養]

神無月に、対の上、院の御賀に、*嵯峨野の御堂にて、薬師仏供養じたてまつりたまふ(十月に紫夫人は六条院源氏殿の四十歳祝いの記念行事として嵯峨野の念仏堂で薬師仏に御礼参拝なさいます)。 *「嵯峨野の御堂(さがののみだう)」は源氏殿 31 歳の今から九年前のこと、絵合会の成功で中央権威の再興を図った学芸政治の今上帝体制を確立した源氏殿にして、自身は出家して身を引く為の、それが本心なのか世間への体裁なのかは今だに定かではないものの、念仏堂を建立したという記事が「山里の閑かなるを占めて、御堂を造らせたまひ」と絵合巻四章四段に記されていた。その御堂が「嵯峨野の御堂」と明示されたのは、松風巻二章二段の光君が紫君に大堰山荘へ出向く口実に「嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御訪らひすべければ、二、三日ははべりなむ」と言ったのが、文字検索した所では初見のようだ。大堰山荘、明石尼上、をうつつら連想させる設定だ。かといって、是が紫の上の明石一族に対する思いや思い遣いを窺わせる作者の意図、とまでは言いきれない。「対の上」という言い方は<実質の奥方>という印象を強く受けるので、六条院の格式と自領寺であるという事情から「嵯峨野の御堂」が設定された、少なくとも対外的にそういう納得が得られる、ものではあったのだろう。また、「薬師仏」は薬事医療の知、即ち無病息災の恵、の象徴。「供養ず(くやうず)」は<供養する>という動詞、らしい。「供養」は祭壇に供物を奉って感謝の意を表すこと、なのだろう。

いかめしきことは(大掛かりな行事は)、切にいさめ*申したまへば(厳に謹めと殿が申しなさっていたので)、忍びやかにと*思しおきてたり(ひっそりとした式にと上は思い、そのように準備なさっていらっしやいました)。 *「申したまへば」の主語は殿。五章一段に「さるは今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと朝廷にも聞こし召し過ぐさず世の中の営みにてかねてより響くを、ことのわづらひ多くいかめしきことは昔より好みたまはぬ御心にて皆かへさひ申したまふ」と朝廷の公式行事を辞退したほどなのだから、それを尻目に勝手に私的な行事を大掛かりで行なえば帝を軽んじることになる。単に気持ちの問題ではない。 *「思しおきてたり」の主語は対の上。

仏(ほとけ、仏像)、経箱(きやうばこ、経典入れ箱)、帙篋(ぢす、経典包みの飾り巻き簾)のとのへ(のお供え具合は)、*まことの極楽思ひやらる(本当の極楽が思いやられる素晴らしさです)。*最勝王経、金剛般若、寿命経など、いと*ゆたけき御祈りなり(とても荘厳な念仏講です)。*「まことの極楽」と言われて、その中身の分かる人ばかりが読者とも思えないが、少なくとも私には分からず、是を<素晴らしさ、見事さ、立派さ>を示す形容詞と捉えて置く。 *「さいしゃうわうぎやう」は Wikipedeia によると「金光明経(こんこうみょうきょう)」のこととされ、概説に<4 世紀頃に成立したと見られる仏教経典のひとつ。大乘経典に属し、日本においては法華経・仁王経とともに護国三部経のひとつに数えられる。>とあり、中身は多分だが「善政護国論」らしい。「こんがうはんにか」は「仁王経(にんわうきやう)」のこととされ、ハンニヤハラミダは密教の念唱という紋きり定番として時代劇から覚えたが、中身は「厄除護国論」らしい。「じゅみやうきやう」は Wikipedia には項目が見当たらないし、他のサイトもヒットしない。ただ、残る護国三部経の一つは法華経なので、その中の当時の最新説くらいを想定して置く。「法華経」は帝王の政治学としては「徳政護国論」あたりだろうか。仏典は左て置き、選民が雑多な敵を實力排除し戦後に徳政を施く、という一つの理想論は、確かに乱暴だが、現実には混沌を打開する唯一の道筋なのかも知れない。「選民」を、在る可くして其処に居る人、と考えれば、是は王家の理想論ではなく、行き詰った社会に於いて、破壊の為の破壊者にはなく、具体解決案を示せる全ての現状破壊者

に勇気を与える言い方にも見える。*「ゆたけし」は<豊かだ>。経典分量の多さ、だろうか。多くの宗派の多くの僧侶、だろうか。どちらにしてもこの描写からすると、この念仏講はどうにも「いかめしき」限りだが、あえて<莊嚴>と言ってしまおう。

上達部いと多く参りたまへり(上流貴族がとても多く参列なさいました)。御堂のさま(御堂あたりの初冬の風情は)、おもしろくいはむかたなく(趣き深く)、紅葉の*蔭分けゆく野辺のほどよりはじめて(紅葉が葉の下を分け入って進む麓の景色から始まって)、見物なるに(山道を登るほど広く見晴らせる絶景なので)、かたへは(半分はその見物も兼ねて)、きほひ集りたまふなるべし(みな競って集まりなされたのでしょう)。霜枯れわたれる野原の*ままに(一面に霜枯れした嵯峨野の原の所々で)、馬車の行きちがふ音しげく響きたり(行き帰りの客で馬や牛車がすれ違う音が何度も響いていました)。*「蔭分けゆく野辺のほどよりはじめて」は「紅葉の、見物なるに」という文の挿入句、なのだろう。*「まま」は「間々」で<あいだあいだ、ところどころ>。

[第二段 精進落としの宴]

*御誦経われもわれもと(僧侶への読経依頼はわれもわれもと)、*御方々いかめしくせさせたまふ(六条院の御部屋様方は盛大に上げさせなさいます)。*「みずきやう」は<殿に捧げる僧侶の読経、への依頼とお布施>。*「おんかたがた」は<六条院の御方々。>と注にある。その「六条院の御方々」とは、花散里と明石御方だけだろうか。姫宮や桐壺妃も含まれるのだろうか。下文に「かく隙間なく集ひたまへるうちに」とあることから、私は含まれると読みたい。であれば、上文の諸侯の様子とこの六条院の御部屋様方の話題とを一続きにする渋谷校訂は私には如何にも分かり難い。即ち、渋谷校訂ではこの文を段落として、下の文の「二十三日を～」からを別段に仕分けしてあるが、私はこの文を「二十三日を～」からに繋げた方が分かり易く思えるので、そう組み替える。まあ、それにしても結局は「いかめしくせさせたまふ」ワケだ。

二十三日を*御としみの日にて(十月二十三日を法要明けの日と決めて)、*この院は(六条院では)、かく隙間なく集ひたまへるうちに(このように御部屋様方が所狭しと大勢集まっていらっしゃる内情なので)、*わが御私の殿と思す二条の院にて(紫夫人は御自分の私的な家とお思いの二条院で)、その御まうけせさせたまふ(その御宴席の支度をさせなさいます)。*「おんとしみ」の「としみ」は「落忌」と漢字表記するようで、古語辞典には<精進落としの事。賀の祝いの時、始めに僧を招いて法要を行い、将来の福德を祈った。それが終わってから饗宴がある。>と説明がある。*「この院」は邸としての六条院のこと、らしい。*「わがおんわたくしのとのおぼす」の主語は対の上。

御装束をはじめ(当日の殿の御衣装をはじめ)、おほかたのことどもも(殆んどの準備を)、皆こなたにのみしたまふ(皆こちらの二条院に詰めて為さいます)。御方々も(他の御部屋様方も)、さるべきことども分けつつ望み仕うまつりたまふ(それぞれ分担を分けて進んでお手伝い申しなさいます)。

対どもは(東西の対屋は)、人の局々にしたるを払ひて(女房たちの小部屋にして使っていたのをその仕切りを払って)、殿上人(帝の御側御用人)、諸大夫(しょだいぶ、各役所の長)、院司(いんじ、院の用人)、下人(しもびと、下級役人)までのまうけ(までの宴席を)、いかめしくせさせたまへり(大人数分用意させなさいます)。

寢殿の*放出を(寢殿を母屋から廂まで一続きの広間にして)、例のしつらひにて(式場用の模様付けとして)、螺鈿の*倚子立てたり(中央に螺鈿装飾の椅子が置かれます)。*「はなちいで」は母屋を開け放って、廂と続き間にした広間様式、だったかと思う。*「倚子(いし)」は式場中央に設けられた殿の座所なのだろうが、何故か<御倚子奉りたまへり>とは言わないようだ。「倚子」が貴人用である事は当時の人にとっては自明の常識であり、こういう場合の慣例句として、式場設営として左様に配置した、という言い方をしたもの、とあって「中央」を補語する。この「立つ」は他動詞で<置く>だ。

*御殿の西の間に(その殿の御席の西側に)、*御衣の机十二立てて(衣装の飾り台を十二個置いて)、夏冬の御よそひ(各月ごとの夏冬の御衣装)、御衾など(おんふすまなど、御掛け布団などを)、例のごとく(いつものように)、紫の綾の*覆どもうるはしく見えわたりて(紫の斜文織布で覆ってあるのが美しく一面を見渡せて)、うちの心はあらはならず(実際には中の実物は見えず奥ゆかしい趣です)。*「おとど」は<貴人の邸宅の敬称>と辞書にあるので、これは寢殿を言い換えたのかと思ったが、此处では「倚子立てたり」を受けて、其処を「御殿=殿の御座」と言っている、と解す。*「おんぞのつくえじふにたてて」は注に<十二か月分という意味。>とある。「机」は「つくえ」と仮名書きがある。*「おほひ」はどういう趣向なのだろう。衣服は実物を用意するのだから隠す事はなさそうに思うが、それでは女の部屋みたいに賑やか過ぎる、のかも知れない。実物が在る事で豊かさは表現出来ている。そして、それらを覆う美しい布で中身の豪華さを偲ばせつつも、その場は紫で統一された落ち着きのある印象を演出する。そんな処だろうか。

御前に置物の机二つ(御席の前には食器置き用の食卓二脚に)、唐の地の*裾濃の覆したり(輸入布地の裾の色が濃い覆いをしてあります)。*挿頭の台は(舞人に与える枝花を置く飾り台は)、沈の*花足(沈の木の装飾脚で)、*黄金の鳥(蒔絵の黄金の鳥が)、銀の枝にゐたる心ばへなど(銀の枝に止まっている絵柄の出来栄えなどは)、淑景舎の御あづかりにて(桐壺妃の御担当で)、明石の御方のせさせたまへる(明石御方が職人に細工させなされたもので)、ゆゑ深く心ことなり(趣き深く格別です)。*「裾濃(すそご)」は<同系色で、上方を淡くし、下方をしだいに濃くする染め方や織り方。>と大辞泉にある。*「挿頭(かざし)」は<髪や冠にさす花や草葉>だが、大辞泉に<舞人や陪従(べいじゆう)の冠にさす造花。儀式や官位によって定まったものを用いた。>ともあり、「挿頭の台」は一般に<装飾品を置く飾り台>だったかも知れないが、此处では<舞人に与える花枝を置いておく台>と解す。*「花足(けそく)」は碁盤の足のように装飾細工がしてある足、なのだろう。*「黄金の鳥」は与謝野訳文の蒔絵装飾に従う。

うしろの御屏風四帖は(御席の後ろの御屏風四帖は)、式部卿宮なむせさせたまひける(式部卿宮が職人に作らせ為されたものです)。いみじく尽くして(とても丁寧に作られていて)、例の四季の絵なれど(定番の季節の風景絵ですが)、めづらしき*泉水、潭など(新しい池の水面や深さの描き方が)、目馴れずおもしろし(目新しくて面白い)。北の壁に添へて(北壁に沿って)、置物の御厨子(置き戸棚を)、二具(ふたよろひ、左右に揃いで)立てて(置いて)、御調度ども例のことなり(そこに書物や文具を決まり通り納めてあります)。*「泉水(せんすい)」は大辞泉に「前水」ともあり<庭先につくった池。また、いずみ。>とある。「潭(たん)」は<水を深くたたえた所。ふち。>とあるので、「泉水」が<池の水面>で「潭」は<その深さ>のそれぞれの表現が新しかった、と解す。

南の廂に(南庭に面した廂の間に)、上達部(政府高官)、左右の大臣(左大臣に右大臣)、式部卿宮をはじめたてまつりて(式部卿宮をはじめに申し上げて)、次々はまして参りたまはぬ人なし

(それ以下の宮様は増して参列なさらぬ人は居ません)。舞台の左右に(庭先では舞台の左右に)、楽人の平張打ちて(伴奏者席の日除けを張って)、西東に*屯食八十具(正面階段下の西東には下臈用の握り飯八十個と)、祿の*唐櫃四十つつ続けて立てたり(記念品の入った荷箱の四十がそれぞれ並べられていました)。 *「屯食(とんじき)」は<握り飯>とのこと。 *「唐櫃(からびつ)」は<荷箱>。

[第三段 舞樂を演奏す]

未の時ばかりに楽人参る(午後二時くらいに舞樂の演奏が始まります)。「*万歳楽(まんざいらく)」、「皇じやう(わうじやう)」など舞ひて(などを格調高く舞って)、日暮れかかるほどに、*高麗の乱声して、「落躑(らくそん)」舞ひ出でたるほど(少しでも舞い出したものの)、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば(まだ平素とは違う儀礼的な舞いだったので)、舞ひ果つるほどに(その舞い終わりに)、権中納言(源の若君と)、衛門督下りて(藤原の若君が舞台から庭へ下りて)、「入綾(いりあや)」をほのかに舞ひて(舞いながらの退場を軽く演じて)、紅葉の蔭に入りぬる名残(紅葉の中に消えてゆく余韻に)、飽かず興ありと人びと思したり(いつまでも情緒が残ると来客の人々はお思いになりました)。 *「万歳楽皇じやうなど」は注に<「万歳楽」は唐楽(左舞)の曲名。平調。四人舞。即位礼などの祝宴に舞う。「皇じやう」も唐楽(左舞)の曲名。平調。>とある。分かり難い注だ。「左舞(さまひ)」は「左方の舞」のことで<雅楽で、左方の楽により、左方の舞人がまう舞。中国・インド系の舞で、舞人は朱色系統の装束をつけ、舞台向かって左側から出入りする。>と大辞泉にある。で、是は<雅楽で、右方の楽により右方の舞人がまう舞。朝鮮および中国東北地方の舞で、舞人は緑色系統の装束をつけ、舞台後方、向かって右側から出入りする。右舞(うまい・うぶ)。>とある「右方の舞」と対比させた説明な訳だが、それ以前に唐楽と高麗楽との違いはおろか、そも雅楽の舞と楽についての馴染みも無く、その味わいの何たるかを私は知らない。邦楽を冷遇してきた現代日本の悲劇だ。ただ、最近は幸いにも YouTube に舞樂のアップもあつたりして、わずかながらその一端を窺い知る事が出来る。中でも「万歳楽」は代表的な曲らしく、特に雅楽道友会による演技の動画は見応えがあつた。「皇じやう」の動画は見当たらなかったが、同じ「平調(ひやうでう)」の曲とあり、平調の代表曲と言われる越天楽に歌詞をつけたものが黒田節ということだが、万歳楽も黒田節のように私には聞こえたので、皇じやうも同じ趣きの曲だろうと大雑把に考えて置く。で、多分だが、この調子の曲は公式の王家礼賛の祝賀舞曲で、多くの場合に万歳楽で始まり皇じやうで終わる様な演奏形態が定型化していて、「など舞ひて」は<儀典としての第一部が終わって>という語りなのだろうと類推する。 *「高麗の乱声して」は注に<高麗楽(右舞)が始まる前に演奏される笛と太鼓による「乱声」。>とある。「乱声(らんじやう)」は<雅楽の笛の曲。舞人の登場のときなどに太鼓・鉦鼓(しょうこ)と合奏する。新楽乱声・古楽乱声・小乱声・高麗(こま)乱声・高麗小乱声などがある。>と大辞泉にある。「高麗の乱声」は「落躑」の舞人の入場曲みたいなものか。「乱声」はほんの一部、「落躑」は一人舞いが YouTube にアップされていた。その動画一本だけの印象だが曲調は「荒城の月」だ。平調の様式美から情緒舞いに移った、ように感じる。それでも「なほ常の目馴れぬ舞のさま(まだ平素の気軽な舞とは違う格調高い儀礼的な舞い)」ではあつたらしい。 *「入綾」は<舞樂で、退場するとき、舞いながら舞台を降りる演出。また、その舞。入舞(いりまい)。>と大辞泉にある。余興の趣き。

*いにしへの朱雀院の行幸に「青海波」のいみじかりし夕べ思ひ出でたまふ人びとは(昔の朱雀院行幸で源氏殿と藤原殿の青海波の舞が見事だった夕べを思い出しなされる古参の人々は)、権中納言、衛門督、また劣らず立ち続きたまひにける(今もそれぞれの子息の権中納言と衛門督が変わらず権勢家を引継ぎなさっている)、世々のおぼえありさま(代々の評判の高さは)、容貌(外見も)、用意などもをさをさ劣らず(内面も少しも先人に劣りなく)、官位はやや進みてさへこそな

ど(官位は少し上回ってさえ居るなどと)、齢のほどをも数へて(先人を同じ年齢の時に照らし合わせて)、「なほ(やはり)、さるべきにて(こうあるべくして)、昔よりかく立ち続きたる御仲らひなりけり(昔から立派に続いてきた御権威一族なんだな)」と、*めでたく思ふ(喜ばしく思います)。 *「いにしへの朱雀院の行幸」は源氏殿 18 歳参議中将、藤原殿 24 歳頭中将、という色を競う盛りの二十二年前十月の話で紅葉賀巻一章一段に試楽での描写だが、「源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将」とあった。「行幸」は此処では「みゆき」と読みがある。因みに現在は、源氏殿 40 歳、藤原殿 46 歳(推)、権中納言 19 歳、衛門督 25 歳(推)、というところ。 *「めでたく思ふ」は高官に対して敬語が無い。

主人の院も(六条院源氏殿も)、あはれに涙ぐましく(感じ入って涙がちに)、思し出でらるることども多かり(思い出し為されて来る事も多くありました)。

[第四段 宴の後の寂寥]

夜に入りて楽人どもまかり出づ(夜になって舞の伴奏者たちは引き上げます)。*北の政所の別当ども(裏の台所で紫夫人の指示を受けた院司たちが)、人びと率ゐて(部下を連れて)、祿の唐櫃に寄りて(褒美品の荷箱の所へ行って)、一つづつ取りて(一つづつ取り出して)、次々賜ふ(伴奏者たちに手渡しします)。 *「きたのまんどころ」は大辞林に<「北」は北の対屋(たいのや)、「政所」は内政を執る所の意>と語説があり、語用は<摂政・関白の正妻の敬称。のちには、大・中納言の妻にもいった。>とある。ということは、「北の政所」は<紫の上>のことに違いないが、紫の上は六条院では<対の上>と指名される。正妻だから「北の政所」と呼ぶ、という説明は成立しない。紫の上はこの二条院では、そして特にこの御落忌に於いては、実際に北の政所で儀式の裏方を取り仕切っていた、ということを示す言い方だと私は読む。だから「別当」は、普段は六条院の対の上付きの院司だが、この儀式のために<特別に紫の上の指示を仰せ付かった者>なのだろう。二条院の家司は人数も少なく日頃の側近でもなく、もしかすると「人びと率ゐて」の「人びと」かも知れない。

白きものどもを品々かづきて(その褒美の白布をそれぞれが肩に掛けて)、山際より池の堤過ぐるほどのよそ目は(築山を背景に池の岸に沿って帰って行く光景は)、*千歳をかねて遊ぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる(御家の千年繁盛を予期して祝い舞う鶴の羽衣に見間違えるようです)。 *「ちとせをかねてあそぶつるのけごろも」は注に<催馬楽「席田(むしろだ)の 席田の 伊津貫川(いつぬきがは)にや 住む鶴の 住む鶴の や 住む鶴の 千歳をかねてぞ 遊びあへる 千歳をかねてぞ 遊びあへる」(席田)の文句による表現。>とある。ざっと、鶴は千年亀は万年、なる長寿祝いの言い回しの類ではありそうだ。が、むしろ催馬楽の「鶴」が何故、「席田」の「伊津貫川」の「鶴」なのか、が分からない。まあ、「伊津貫川の鶴」については川辺沿いの湿地平原に鶴が居たんだろうし、「席田」は其処の地名ではありそうだ。「席田」はムシロになるようなイグサが群生した湿地、だろうか。筑前とは今の福岡にもある地名らしいが、これは美濃とは今の岐阜県本巣市にあった地名を言うようだ。というのも、この際だからと小学館日本古典文学全集 25 の催馬楽「席田」の解説を頼ると、美濃国は陽成天皇の大嘗祭(877 年)で献上米に選ばれた国とのことで、その田に遊ぶ鶴の姿に天皇の長寿を言祝いだもの、として広まったように述べられていたからだ。大嘗祭は毎年行なう新嘗祭(収穫祭)とは違って、即位後初めて且つ在位中に一度だけ行なう大収穫祭で、その成功は皇位継承の正当性を証明する意味付けとして特に重要なだろう。「千歳をかぬ」の「かぬ」は「予ぬ」と漢字表記され<予言する、予想する>と古語辞典にある。千歳を予想する、は<長寿を祝う>ということらしい。「あそぶ」は鶴の姿を演舞に例える言い方なのだろう。

御遊び始まりて(こうして式典演目が終わり、お身内での楽しみとしての管弦演奏が始まって)、またいとおもしろし(またとても面白い宴席です)。御琴どもは(弦楽器類は)、春宮よりぞ調へさせたまひける(義理の息子の筋となる皇太子がお揃え下さいました)。朱雀院よりわたり参れる琵琶(朱雀院から持ち込まれた元は御所に在った琵琶に)、琴(きん、七弦古琴)。内裏より賜はりたまへる箏の御琴など(御所から今回皇太子が賜わりなさって持ち込まれた十三弦など)、皆昔おぼえたるものの音どもにて(皆昔から聞き覚えのある音色たちで)、めづらしく掻き合はせたまへるに(久しぶりに弾き合わせなされると)、何の折にも(その節々に)、過ぎにし方の御ありさま(源氏殿は桐壺帝に付き暮らした子供頃の出来事や)、内裏わたりなど思し出でらる(その時分の宮中の様子などが思い出されなさいます)。

「*故入道の宮おはせましかば(亡き藤壺入道宮がご存命であれば)、かかる御賀など(こうした四十歳の御祝賀を)、われこそ進み仕うまつらましか(どれほど私が率先して仕えさせて頂きたかったものか)。何ごとにつけてかは*心ざしも見えたてまつりけむ(それで少しは私の忠誠心をお分かり頂きたかった)」 *「故入道の宮おはせましかば」は注に<以下「見えたてまつりけむ」まで、源氏の心中。藤壺は三十七歳で薨去。「ましかば—まし」の反実仮想の構文。>とある。で、この「まし」は「われこそ」という自分の意志なので、客観推量の<~だろう>ではなく、希望表明の<~したい>だ。で、願望の助動詞「まし」につく終助詞「か」はその願望の程度の深さを示すので、反実仮想構文にあっては<どれほど~したかったことか>という言い方。で、下の「何ごとにつけてかは」はその<「か」の程度>の補足説明だから、条件項の「何ごとにつけて(どうすれば)」に「かは(反語ないし疑問の係助詞)」を付与した構文ではなく、副詞句の「何ごとにつけてか(ほんの少しでも)」を「は(限定の格助詞)」で述語対象と明示した構文だ。なお、「見えたてまつりけむ」は<藤壺宮に>お分かり頂けたらろう>という言い方だが、此処の過去推量の助動詞「けむ」は「まし」構文に内包される文脈なので、是も客観視の<~だっただろう>ではなく、願望の<~であってほしかった>の意味になる、という会話文ならではの言い回し。 *「こころざし」は第三者に言う意味では<臣下としての忠誠心>なのだろう。

と(と源氏殿は入道宮の早世を)、飽かず口惜しくのみ思ひ出で*きこえたまふ(いつまでも残念に思い出し申しなさいます)。 *「聞こえ」の謙譲は<入道宮に対して>なので補語する。

内裏にも(帝に於かせられても)、故宮のおはしまさぬことを(故母宮の現には御出でなさらない事を)、何ごとにも榮なくさうざうしく思さるるに(何につけても張り合い無く物足りなく思えなされあそばすので)、この院の御ことをだに(せめてこの院の御賀のことだけでも)、例の跡のあるさまのかしこまりを尽くしてもえ見せたてまつらぬを(上皇の御賀の前例に倣った畏まった公式の祝典をして差し上げられないのを)、世とともに飽かぬ心地したまふも(ままならない事情と満たされぬ思いにお成りなので)、今年はこの御賀にことつけて(今年はこの六条院の四十賀ということで)、行幸などもあるべく思しおきてけれど(御幸などなされたいとお考えでいらっしやいましたが)、

「*世の中のわづらひならむこと(私の長寿祝いが大袈裟になるのは、世間の迷惑になることなので)、さらにせさせたまふまじくなむ(けっして為さらないように願います)」 *「世の中のわづらひ」について、与謝野訳文は<国庫負担の増加>を示していて面白い指摘だ。が、「世の中のわづらひ」という語は<世間の迷惑>という言い方であり、帝と源氏殿との間の符丁で言えば<世間の勘繰り>を意味するのだろう。いくら、後見者であり政権の功労者にして一世源氏の実兄、という表向きの間柄での親しさを世間が認めても、父帝

である故桐壺帝から臣籍降下を宣された者を准太上天皇という特別な地位に就かせる事だけで十分に異例であり、その上に重ねての御幸という厚遇を与えては、より特別な関係を世間から疑われかねない。そして、それが事実だから源氏殿は厳に戒めた、に違いない。ただ、確かに行幸には多額の国庫出費は要しただろう。警護の人員と公式行事としての式次第に携わる参列者の多さとその衣装や牛車や道具類の手配は当日の事だけでなく、その準備に於いても相当な経費が嵩む。そして、参列者各位に於いても晴れの式典出席に際して用意立てるものは少なくない。が、国民に対して説得力がある御所儀式的敢行は国体の威厳を保つ政治そのものだ。その「説得力」とは、その式典による需要喚起と消費拡大が、その時点での拡大再生産技術に有効投資される機構組織が現状整備されているという構成員各位の社会認識が担保する。つまり望ましい「御幸」とは、一定の有効な政治体制を獲得した一定の組織の嬉しい記念行事だ。だから、源氏殿は政治家なので現下の政情分析として、自分の長寿祝賀での行幸は有効な再投資にならないと言った、という解釈は一面を突いてはいるかも知れない。

と否び申したまふこと(と源氏殿が御辞退申しなさるのが)、たびたびになりぬれば(度々になったので)、口惜しく思しとまりぬ(帝は残念にも思い止まりなさいました)。

[第五段 秋好中宮の奈良・京の御寺に祈祷]

師走の二十日余りのほどに(十二月の二十日過ぎという押し迫った時に)、中宮まかでさせたまひて(梅壺中宮が六条院に里下がりなさって)、今年の残りの御祈りに(今年の最後の源氏殿の四十賀の長寿願いの御祈祷を)、*奈良の京の七大寺に(南都七大寺に)、御誦経(みじゅきやう、読経上げを依頼するお布施として)、*布四千反(麻布地四千着分)、この近き都の四十寺に(この京都の四十寺に)、*絹四百疋(絹織物八百着分)を分かちてせさせたまふ(をそれぞれ分けて納めあそばします)。*「奈良の京の七大寺」は<東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺。>と注にある。*「布(ぬの)」は下に絹が別記載されているので、麻を想定して置く。「反(たん)」は着物一着分の布地で幅34cm長さ約10m。四千着を七で割ると一寺当たり五百七十着くらい。*「絹」は絹織物。「疋(ひき)」は<2反続きの反物を単位として表す語。大人の着物と羽織とを対で作るときなどに用いる。>と大辞泉にあり、一疋が二反とのこと。八百着を四十で割ると一寺当たり二十着。

ありがたき御はぐくみを思し知りながら(中宮は殿の有難い御庇護を御承知でいらっしゃるので)、何ごとにつけてか(いくらかでも)、深き御心ざしをもあらはし御覽ぜさせたまはむとて(深い御謝意を表しお見せ申しあそばしたいとの事で)、父宮(父宮の故前皇太子や)、母御息所の(母君の故六条御息所も)*おはせまし御ための心ざしをも取り添へ思すに(天で御思いであるに違いない殿への感謝まで併せてお考えになるものの)、かくあながちに(殿がこうも頑なに)、朝廷にも聞こえ返させたまへば(帝にも御辞退申しなさっている)、ことども多くとどめさせたまひつ(多くの祝賀計画を中止なさっていらっしゃいました)。*「おはせまし御ための心ざし」は注に<「まし」反実仮想の助動詞。>とある。「御ため」の「おん」は親なのか殿なのか私には分からない。親であれば、「御ための心ざし」は<殿への親の感謝に成り代わって>という言い方で、殿なら<親の殿への感謝>となって、現代語ではどちらも「殿への親の感謝」に変わらない。

「*四十の賀といふことは(四十の賀というものは)、さきざきを聞きはべるにも(先例を聞きまですところ)、*残りの齢久しき例なむ少なかりけるを(その後の長寿の例というのが少なかった)、このたびは(私の場合は)、なほ(今は)、世の響きとどめさせたまひて(世を騒がす大きな祝

賀はお止めあそばされて)、まことに後に足らむことを*数へさせたまへ(後で本当に長寿であったことを確かめて、からお祝い、下さい) *「四十の賀といふことは」はく以下「数へさせたまへ」まで、源氏の四十の賀を盛大に祝うことを辞退する詞。>と注にある。 *「残りの齢久しき例なむ少なりける」は注にく『河海抄』は仁明天皇四十一、村上天皇四十二、東三条院四十にて崩御の例を挙げる。>とある。是は辞退の方便だろうから、意味としてはくそういうことも有り得るから>くらいが程良くて、実例はあまり無い方が無難なのではないだろうか。実例が多いと「四十の賀」そのものの否定になってしまう。 *「数へさせたまへ」はくお数え下さい>だが、「なほ世の響きとどめさせたまひて」という今の条件下での祝賀制止と、「後に」という別の条件下での祝賀許諾を対比させた構文なので、この「数ふ」にはく祝賀する>が含意されている。

とありけれど(殿の御辞退の弁は在ったが)、公さまにて(この中宮の長寿祈願読経祭は公式の催事となって)、なほいといかめしくなむありける(やはり盛大に営まれたのです)。

[第六段 中宮主催の饗宴]

宮のおはします町の寝殿に(宮の御出でになる秋の町の寝殿に)、御しつらひなどして(御祝賀の様付けをして)、*さきざきにごと変はず(前の紫の上主催の宴席などと変わらず)、上達部の禄など、*大饗になずらへて(高官への引出物などは新年祝賀と同等に)、親王たちにはにごと*女の装束(親王たちには特に色柄織物)、*非参議の四位(参議経験者や)、*まうち君達など(公卿の子息たちなどの)、ただの殿上人には(特に役職の無い上流貴族には)、白き*細長一襲(白い飾り布の一着やら)、*腰差などまで(巻き服地などまで)、次々に賜ふ(身分ごとの位に応じて賜われます)。 *「さきざきにごと変はず」はく玉鬘や紫の上が主催した四十の賀と比較しての意。>と注にある。 *「大饗(だいきやう)」はく平安時代、宮中または大臣家で正月に行った大がかりな宴会。>と大辞泉にあり、Wikipediaにはく二宮大饗(にぐうのたいきやう)は、毎年正月2日に親王・公卿以下近臣などが、中宮(皇后)及び東宮(皇太子)に拝謁して饗宴を受ける儀式である。>およびく古くは左大臣が4日、右大臣が5日に開くとされていたが、後には1月中下旬にずれ込む>との説明がある。が、具体的な「禄(ろく、褒美・記念品・引出物)」の内容までは記載がない。此処では「禄など大饗になずらへて」とあるので、むしろ此処の記述がそれらの具体例を示している。それにしても、暮れの押し迫ったこの時期に「大饗になずらへて」禄を与え、また直ぐに新年祝賀を迎えるのだろうか。寺への布施もあったし、やはり相当な出費になりそうだ。 *「女の装束」がどんなものか分からない。ただ、男の正装のような決まりごとが無い物、くらいに考えてく色柄織物>と言って置く。 *「非参議の四位」はく前官の参議。>と古語辞典にある。 *「まうち君」は「前つ君」の音便でく天皇の御前に伺候する人を尊敬するという語。>と古語辞典にあり、即ちく公卿>とある。「きんだち」はくご子息>。 *「細長」は内着の上に掛けて着た飾り布、らしい。「ひとかさね」の「かさね」は細長の数え方なのだろう。だからく一揃い>ではなくく一着>。 *「こしざし」はく褒美として賜る、巻いた絹。腰にさして退出するのでいう。こしづけ。わきざし。>と大辞泉にある。

装束限りなくきよらを尽くして(殿は中宮が用意なされた最上の束帯姿で)、名高き帯(名品と名高い石帯に)、御佩刀など(みはかしなど、おはきになる御太刀など)、故前坊の(こぜんぼうの、中宮の父宮であらせれる故前皇太子の)御方さまにて伝はり参りたるも(御形見として伝わるものをご着用なされているのも)、またあはれになむ(また趣き深いものです)。古き世の一の物と名ある限りは(古来から第一の名品とされるものの全てが)、皆集ひ参る御賀になむあめる(皆集められて殿に献上された御祝賀のようでした)。

昔物語にも(こうした御賀での昔からの言い伝えにも)、もの得させたるを(どういうものを振舞ったかが)、かしこきことには数へ続けためれど(宴席の豪華さを語るものとして、その立派な品々の一つ一つを数え上げてあるようだが)、いとうるさくて(この宴席ではそれらはとても多過ぎて)、こちたき御仲らひのことどもは(それぞれのお相手に応じた具体事例は)、えぞ数へあへはべらぬや(とても数え切れましようや)。「昔物語」は御伽草子の意味での昔話ではなく、参照すべき前例からの習わし、のことだろう。また、この文は語り手自身の傍観者としての感想のような書き方の所為か、「もの得させたる」「かしこきこと」「いとうるさし」「こちたき御仲らひのことども」の語用が何を意味するか非常に分かり難く相当程度に私なりの当て図法で言い換えたが、事実関係の認識を変える事柄には言及していないと踏んで遣り過ぎて置く。もし、此处に物語上の構図に決定的な変更を示す重要な記述が在るとしたら再読が必要になるワケだが、その事に何時何処でわたしは気付くことが出来るのだろうか。

[第七段 勅命による夕霧の饗宴]

内裏には(帝は)、*思し初めてしことどもを(折角思い立ちなさった数々の祝宴開催を)、むげにやはとて(何一つ出来ないままではどうにも口惜しいという事で)、中納言にぞ*つけさせたまひてける(中納言の方に祝宴の理由をお付け為さったのです)。*「思ひ初む」は<考え出す、思い始める>で、「ことども」は<季節に応じた数々の御賀の仕方>なのだろう。「思し初めてし」の「てし」は、「むげにやは」の「やは」と組み合わせた語用に見える。是がもし、「思し初めしことどもを、むげにとて」という文だったとしても、それで<お考え出しなさった数々の祝宴をしないでは惜しいという事で>という意味には成る。文法解釈は面倒になりそうなので語感で済ますが、つまり「てし～やは～ける」はその口惜しさを強調する文型なので、此处の文意は言い換え文の如くなる、かと思う。*「つく」は「付く」だろうか。「さす」は使役ではなく敬語だろう。だから「つけさせたまふ」は<(中納言に)段取りを付けさせなさる>のではなく、祝宴開催の理由を<(中納言のことに)託けなさる>という言い方なのだろう。帝は源氏殿が実父だという事情を承知している。だから、中納言を弟と思ひもするだろう。弟を道具立てるといふ身内感覚に帝が家族の一体感を覚えて格別にこの案を喜んだ、みたいな演出だろうか。「たまいてける」という帝に対して親しげな口調は帝の浮かれ気分を示す筆致だ。

そのころの*右大将(ちょうど時の右大将が)、病して辞したまひけるを(病で辞職なさっていたので)、この中納言に(この中納言の源君にその後任を)、*御賀のほどよろこび加へむと思し召して(この中宮主催の祝宴当日に慶事を重ねて祝うべくお思いあそばして)、にはかになさせたまひつ(急に帝はご命じあそばしました)。*「右大将」は注に<系図不詳の人。>とある。対の姫婿の藤原右家筆頭が前の右大将だったが、今は左大将に出世している(当若菜上巻二章五段に「左大将の北の方」とその妻である源氏殿の養女の藤原姫を呼称したのが初見、に思う)。左家筆頭は藤氏長者である藤原殿で太政大臣だが、その長男は衛門府長官だ。系図不詳といっても、当時の高官は総じて藤原氏だろうし、傍流も中央高官には余程の事が無ければ抜擢されないし、左家であれば少しは続き柄に言及が有りそうなので、この不詳者は右家の次男以下か従兄弟に当たる可能性が高い。*「御賀のほど」とあるので、この任命宣旨は中宮主催の祝宴当日に正に「にはかに」下された、ということなのだろう。下文の源氏殿の言葉は遣わされた勅使に対しての返答という場面だろうか。と思つたら、是は早馬の知らせに漏らした感想らしく、勅使は何と太政大臣自らの御出座らしい。全くの「公けざま」で目も眩むようだ。何でも有りの趣で、良く分からない展開だ。

院もよろこび聞こえさせたまふものから(六条院源氏殿も喜び申しあそばすものの)、

「いと、かく、にはかに余る喜びをなむ(それにしてもこのような急な身に余るお引き立てを頂きましては)、いちはやき心地しはべる(早過ぎる出世に思われます)」

と卑下し申したまふ(と子息の昇進を謙遜なさいます)。

*丑寅の町に(御賀の六条院にあつて比較的静かな、北東の夏の町に)、*御しつらひまうけたまひて(会見場をご用意なさつて)、隠ろへたるやうにしなしたまへれど(殿は目立たないように勅使をお迎え為さろうとしたが)、*今日は(この日の宴席は中宮も事情を承知していらして)、なほかたことに儀式まさりて(更に格式高い接待様式にますますなつていて)、所々の饗なども(秋の町以外での各所でのご馳走なども)、*内蔵寮(くらづかさ、御所の宝物蔵や)、*穀倉院より(米倉から)、*仕うまつらせたまへり(人と物を動員してのご接待をしていらっしやいました)。*「丑寅の町」は中納言源君が暮らしていた、という意味かと思つたが、下に「隠ろへたるやうにしなしたまへれど」とあるので、御賀で賑わう六条院の中では比較的落ち着いた場所、という設定と読む。*「御しつらひ」はく勅使をお迎えする会場>だろうから、「まうけたまひて」の主語は源氏殿。*「今日はなほ形殊に儀式まさりて」はく今日はその上に特に格式高い宴会様式が加わつて>という言い方だ。で、その「今日は」は中宮主催の御賀で「大饗になずらへて」執り行われるという格式の高さだ。それが、その上に「なほ形殊に儀式まさりて」という被せ方の仰々しさは呆れるほどだが、中宮は源氏殿の養女ではあるが、帝の後でもあつて、当然に帝の一計は承知して、相談の上か命令かはともかく、中宮は帝の意向を汲んで源氏殿が「公けざま」の祝宴を辞退出来ない形に仕組んだ、という話運びだと私は読みたい。でも、とても分かり難い文だ。*「内蔵寮」は「くられう」とも言われく律令制の官司の一。中務(なかつかさ)省に属し、金銀・珠玉や供進の御服、祭祀(さいし)の奉幣などをつかさどり、内蔵(うちくら)の管理を担当した。うちのくらのつかさ。くらづかさ。>と大辞泉に説明がある。ざつと宝物庫で、さぞ儀式用の立派な食器を管理していたのだろうが、此処ではそれらの品々と共に、「仕うまつらせたまへり」とあるので、帝が其処の役人を動員して給仕を手伝わせた、という事かと思う。*「穀倉院」はく平安時代、京都にあつた朝廷の穀物倉庫。畿内諸国の調銭や、無主の位田・職田(しきでん)・没官田(もつかんでん)などの米穀を納めておいて、年間の供給の食料、貧民救済、学問料に充てた。>と大辞泉にある。*「仕うまつらせたまへり」の主語は下文に「宣旨うけたまはりて」とあるので此処の主語も帝、とも見えるが、「今日は～勝りて」の文脈からして、私は此処の主語は中宮と読んで置く。何れ帝の肝いり、には違いないが。

屯食など(配膳の席次などは)、公けざまにて(正式にするようにとの)、頭中将宣旨うけたまはりて(帝の命を頭中将が承つて)、親王たち五人(みこたちごにん)、左右の大臣(ひだりみぎのおとど)、大納言二人(だいなごんふたり)、中納言三人(ちゅうなごんさんにん)、宰相五人(さいしやうごにん)、殿上人は(てんじゃうびとは、高官たちは皆列席なさり)、例の(恒例の朝廷行事の時のように)、内裏(御所や)、春宮(東宮御所や)、院(主だった大邸宅に)、残る少なし(残る管理責任者は少なかったのです)。「とんじき」はく玄米の強飯(こわめし)を握り固めて、鶏卵の形のようにしたもの。また、それらを載せた膳。平安時代、宮中または貴人の宴会のとき、庭上で下仕えの者にたまわつた。とじき。>と大辞林にある。ざつと、握り飯のことを言う場合が多いようだが、少し広く取れば簡易式または臨時の弁当あたりか。しかし、弁当と考えても此処の「屯食など、公けざまにて」の文意は分からない。が、「頭中将宣旨うけたまはりて、」の注に<朝廷の饗宴の場合と同様に頭中将が勅命によって行つた。この頭中将は、系図不詳の人。述語は省略されている。>とあり、分かり難い注ながら、この読点は下に<仕うまつり、>という述語が省略されている、と読むべきものらしい。であれば、それでも相当に拡大解釈すればだが、「屯食など」を<昼食会での配膳などは>と取り、「公けざまにて」を<朝廷の饗宴の場合と同様の正式な席次で>と取り、「頭中将宣旨うけたまはり

て」をく行なうようにとの帝の命を筆頭側用人の頭中将が承って」と取り、「殿上人は、」の読点にく皆参列し」を補い、「例の」をく恒例の朝廷儀式の時のように」と取る事で、それなりの文意が成立する。私は一応こう読んで置くが、仮に別の文意だとしても、その分かり難さに変わり無く、こう読んで見ても、この文の各員人数の詳しさと文体の粗雑さは女房語りにしては否に事務的だ。雑色の走り書きをそのまま写したか。

御座(おまし、殿のお座椅子や)、御調度どもなどは(その周りの調度品などは)、太政大臣詳しくうけたまはりて(太政大臣が帝の仰せを詳しく承って)、仕うまつらせたまへり(調整設置申し上げなさいました)。今日は(そしてこの当日は)、仰せ言ありて渡り参りたまへり(帝の仰せにより勅使として六条院に出向き参上申しなさいました)。

院も(六条院源氏殿もその格式あるお座椅子の拵えと藤原殿のご参上に)、いとかしこくおどろき申したまひて(とても恐縮し意外だどご挨拶申しなさいて)、御座に着きたまひぬ(お席にお着きなさいました)。母屋の御座に(もやのおんぎに、その母屋に南向きに設えられた殿のお席の)向へて大臣の御座あり(正面の南廂に大臣のお座椅子が北向きに置かれています)。いときよらにもものものしく太りて(とても立派に貫禄をつけて太って)、*この大臣ぞ(この藤原大臣こそが)、今盛りの*宿徳とは見えたまへる(今最も勢いのある恵み豊かな人にお見えなさいます)。*藤原殿 46 歳(推)。*「宿徳」は「しうとく」と読みがあり、意味はく僧などが修行して、人徳のあること。また、その人や、そのさま。>またはく落ち着いて威厳のあること。重々しく、どっしりしていること。また、そのさま。>と大辞泉にある。「人徳」は言い過ぎだし、「威厳」は「ものものし」と被る。で、字面からみると「宿徳」はく徳を得ていること>のようで、ざっとく恵まれている>くらいの言い方かと思う。

主人の院は(あるじのゐんは、六条院殿は)、なほいと若き源氏の君に見えたまふ(今なおとても若い源氏青年にお見えになります)。御屏風四帖に(みびやうぶしでふに、お座椅子の後ろの御屏風四帖に)、内裏の*御手書かせたまへる(帝がご自身でお書きあそばした詩文の御筆跡があるが)、唐の綾の*薄毯に(からのあやのうすたんに、輸入品の薄い毛織物の屏風地に)、*下絵のさまなどおろかならむやは(描かれた下絵の姿なども形ばかりの物であろう筈もない)。おもしろき春秋の*作り絵などよりも(変化に富む春秋の彩色画などよりも)、この御屏風の*墨つきのかかやくさまは(この御屏風の下絵と詩文の兼ね合いの光彩は)、目も及ばず(見たこともないもので)、*思ひなしさへめでたくなむありける(帝がお書きあそばしたものと見る所為か殊の他有難いように思えます)。*置物の御厨子(その他の飾り物の戸棚や)、弾き物(弦楽器)、吹き物など(管楽器などは)、*蔵人所より賜はりたまへり(蔵人所の品物から帝が下されたものでした)。*「御手(おんて)」はく御筆跡>で、この場合は下絵のある屏風に書かれた詩文や和歌などらしく、男手なので詩文かと思う。*「薄毯」は古語辞典には「うすだん」として項目があるが、説明はく白地を薄紫色に染めたもの。>としかなく、どういう物なのか分からない。「毯(たん)」は絨毯の毯だから毛織物だと思って置く。「唐の綾」はく唐製の綾織物>だろうか。しかし、地紋のある白い毛織物を薄紫色に染めたもの、は相当に珍品で、稀少性のある高級品だとしても、それが屏風地に適しているような気はしない。また、「毯」をフェルトだとすれば、それを薄紫に染めたものを屏風紙の裾の方に山や波に見立てて貼り付けたとしたら、シルエット・デザインで洒落ているような気もするが、この文で其処までは読めない。結局分からないが、なるべく原文に沿えばく唐製の薄手の毛織物の屏風地>くらいか。*「下絵」はく詩文などを書くための紙・絹などにあらかじめ描かれた絵。>と大辞泉にある。恐らくは淡い墨絵なのだろう。*「作り絵」はく大和絵の技法の一。墨線で下描きし、その上から彩色を施し、最後に人物の顔貌や衣の輪郭などを墨線で精緻(せいち)に描(か)き起こすもの。平安時代の源氏物語絵巻が典型的な例。>と大辞泉にある。

*「墨つき」はく筆跡の墨の付きぐあい。筆のあと。筆跡。>と大辞泉にあり、此处では下絵と詩文の兼ね合いなのだろう。 *「思ひなし」はく思い込み>。「さへ」は此处ではく(そうでなくても優れているが、そうなのだから)その上更に素晴らしい>という語用で、「思ひなしさへ」はくそう思っている所為か>という言い方。 *「置物」はく飾り物>。 *「蔵人所」は清涼殿の南隣の校書殿の西廂を詰所としていたとのことで、帝側近の蔵人が管理する品という事だから、帝自身が気に入った校書殿所蔵の良品だったのだろう。

大将の御勢ひ(右大将となった源君の御権勢も)、いといかめしくなりたまひにたれば(とても重々しいものになってきたので)、うち添へて(その就任式も加わって)、今日の作法いとことなり(今日の式次第は特に盛大です)。御馬四十疋(おんうましじふひき)、左右の馬寮(ひだりみぎのうまづかさ、御所の左右の馬屋から召し出され)、*六衛府の官人(内裏警護の実務武官が)、上より次々に牽きととのふるほど(階級の上位の者から順々に牽き揃えて整列する馬場の中を源君が長官として閲兵する内に)、日暮れ果てぬ(日はすっかり暮れたのです)。 *「六衛府(ろくゑふ、りくゑふ)」は左右の近衛・衛門・兵衛の各内裏警護の武官組織。「官人(くわんじん、くわんにん)」は下級役人・下級武官で、役付きの管理官に対しての実務官。

[第八段 舞楽を演奏す]

例の(例によって庭先では近衛の楽人が)、「万歳楽(まんざいらく)」、「賀王恩(がわうおん)」などいふ舞(などという祝賀舞を)、けしきばかり舞ひて(短時間で形ばかり舞うと)、大臣の渡りたまへるに(藤原殿がお見えになっていらっしゃるので)、めづらしくもてはやしたまへる御遊びに(楽しみだからと殿が早く始め為さる御遊びでの楽器演奏に)、皆人(親しい参列者は皆)、心を入れたまへり(没頭なさいました)。

琵琶は、例の兵部卿宮(いつもの兵部卿宮)、何ごとにも世に難きものの上におはして(何ごとにも世に稀なものの上でいらして)、いと二なし(並ぶ者がいません)。御前に琴の御琴(おまへにきんのおんこと、殿は七弦の古琴)。大臣、和琴弾きたまふ(藤原大臣は和琴をお弾きなさいます)。

年ごろ添ひたまひにける御耳の聞きなしにや(長年お付き合いなさってきた御耳で聞きなされる所為か)、いと優にあはれに思さるれば(まことに優美で感慨深くお思いなされて)、琴も御手(きんもおんて、殿も古琴の秘儀を)をさをさ隠したまはず(少しも隠しなさらず)、いみじき音ども出づ(実に趣き深い音色が奏でられます)。

昔の御物語どもなど出で来て(昔の思い出話の数々も出て来て)、今はた(今は子供たち同士の縁組で更に深まった)、*かかる御仲らひに(こうした源氏殿と藤原殿の縁戚関係に)、いづ方につけても(昔話も今の話題でも)、聞こえかよひたまふべき御睦びなど(互いにお話し合いなさる事が多い御親しさで)、心よく聞こえたまひて(機嫌良く会話なさって)、御酒あまたたび参りて(御盃を何度も重ねなさって)、もののおもしろさもとどこほりなく(演奏の情趣も増す一方で)、御酔ひ泣きどもえとどめたまはず(御二人の酔い泣きが続きました)。 *「かかる御仲らひ」は注にく昔は従兄弟どうし、今は子供たち夕霧と雲居雁の舅どうしという関係。>とある。

御贈り物に(殿から大臣への贈り物として)、すぐれたる和琴一つ(上等な和琴一つと)、好みたまふ高麗笛添へて(大臣がお好きでいらっしゃる高麗笛を添えて)、紫檀の箱一具に(したんのはこひとよろひに、高価な紫檀箱一組には)唐の本ども(漢学書類や)、この草の本など入れて(和本の草子類などを入れて)、御車に*追ひてたてまつれたまふ(帰りの御車に積み入れ申しなさいます)。*「おふ」は「追ふ(後から追いかける)」の漢字を当てられているが、動き出した行列を止めるのは穏やかではない。是は多分、「負ふ(積む)」と「追ふ(遠ざかる帰りの後姿を見る)」との掛詞だろう。注には<『集成』は「贈り物の通例の作法である」と注す。>とある。

御馬ども迎へ取りて(閲兵式の為に美しい馬具を装着した馬たちを牽いて御所へ引き上げる)、右馬寮ども(みぎのつかさども、馬屋係の蔵人たちは)、高麗の樂して(別れの定番の望郷歌を)、ののしる(大声で歌います)。六衛府の官人の祿ども(整列していた隊長たちへの褒美は)、大将賜ふ(新任大将の源君がお与えになります)。

御心と削ぎたまひて(殿のご意向だからと簡素になさって)、いかめしきことどもは(大掛かりな諸侯の拝謁儀式は)、このたび停めたまへれど(この度はお止めになったが)、*内裏(帝)、春宮(皇太子)、一院(いちのゐん、朱雀院)、後の宮(中宮と)、次々の御ゆかりいつくしきほど(頂点の王家に御縁のある殿の畏れ多さは)、いひ知らず見えにたることなれば(言わずとも知れ渡っている事なので)、なほかかる折には(やはりこうした祝宴の折には)、めでたくなむおぼえける(広く世間も喜ばしく思うのでした)。*「内裏、春宮、一院、後の宮」という順が公式な序列らしい。

[第九段 饗宴の後の感懐]

大将の(だいしゃうの、源氏殿にはご子息が右大将の)、ただ一所おはするを(ただお一人でいらっしゃるのを)、さうごうしく栄なき心地せしかど(物足りなく御家勢も地味なような気もするが)、あまたの人にすぐれ(本人が抜き出て優秀で)、おぼえことに(人気があつて)、人柄もかたはらなきやうにもものしたまふにも(身分も同年代では比類ないほどに出世していらつっしゃるのも)、かの母北の方の(母君である故葵の上が)、伊勢の御息所との恨み深く(中宮の母君の伊勢御息所との遺恨深く)、*挑みかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむ(競い合いなされたという御因縁同士の結果が出たような)、さまざまなりける(源君と中宮のそれぞれのご栄達振りなのでした)。*「挑み交はず」は<競争し合う>。この文の大意について、注には<『全集』は「語り手の感慨」と指摘。『集成』は「それぞれのお子たちの身の上なのだ。車争いに恨みをのんだ御息所の娘は中宮になり、夕霧はただの臣下である」と注す。>という見方を参照掲示してある。が、この文の前半は源君の出世振りを持ち上げているので、注にある「ただの臣下」を強調した文意とは取れない。此処の語りはむしろ、いくら遺恨が残るほどの傍目には見苦しい争いであっても、当人同士が高い志を持って切磋琢磨し合つて努力する事がやがては恵み多い実を結ぶ、という競争礼賛論に見える。素材開発も進まず、動力利用も限定的な機械機構で、薬師も未だ力及ばない、陰陽師の呪いに頼る怨霊うごめく平安期にあつて、作者が何処まで怪奇現象を引いて見ていたのかは分からないが、この文に基本的に人間の開発力を信じる前向きな姿勢が感じられるのは、作者が勝者の藤原氏だったからだろうか。

その日の御装束どもなど(その日の新任大将の束帯御衣装類は)、*こなたの上なむしたまひける(この夏の町の主たる花散里がご用意なさいました)。*「こなたの上」は<こちらの御方様=丑寅の

町の女主人＝花散里＞ということらしい。花散里が「うへ」と呼称された事は以前にはなかったように思うが、何か意図がある語用なのか、単なる尊称なのか分からない。ただ、この記事からすると、源君の大將就任祝会場が夏の町に設営されたのは、夏の町が静かだったからではなく、母代わりの花散里が遠巻きにでも源君の晴れ姿を垣間見れるようにとの、殿の計らいであったようだ。やはり、その方が素直な解釈か。

禄どもおほかたのことをぞ(部下に与える引出物類の殆んどは)、*三条の北の方はいそぎたまふめりし(源君の三条夫人がご用意なさったようです)。*「三条の北の方」は注に<雲居雁をいう。「北の方」という呼称。>とある。「北の方」は<《寢殿造りで、多く北の対屋(たいのや)に住んだところから》公卿・大名など、身分の高い人の妻を敬っていう語。北の御方(おんかた)。北の台。>と大辞泉にある。源君が大將に昇進したから、夫人の呼称も重々しくなる、のだろうか。源君 19 歳、北の方 21 歳。非常に若い大將だ。

折節につけたる御いとなみ(季節行事や他のお祝い事や)、うちうちのもののきよらをも(内輪での管弦や歌詠みの風情事さえ)、*こなたにはただよそのことにのみ聞きわたりたまふを(夏の町ではただ他所事としてお聞き付けなさるのを)、何事につけてかは(何か少しくらいは)、かかるものものしき数にもまじらひたまはましと(こうした晴れ舞台に関わりたいものと)、おぼえたるを(御方様はお思いだったが)、大將の君の御ゆかりに(この度は大將君の御縁で)、いとよく数まへられたまへり(とても良く面目を施されました)。*「こなたには」は注に<花散里方をいう。>とある。御方様、個人というよりも、夏の町の運営全体、を言うような語感。